

答辞

春の暖かさも訪れ、学内の花々が鮮やかに咲き誇る季節となりました。

本日は、私たち卒業生のために、このような素晴らしい卒業式を挙行していただき、誠にありがとうございます。また、ご多忙の中、ご臨席賜りました皆様、そしてライブ配信でご覧になっている皆様にも、卒業生一同厚く御礼申し上げます。

期待と不安を胸に抱え、武蔵大学の門をくぐった日から、はや四年が経とうとしています。かろうじて対面での開催が可能となった入学式。私たちはマスクを身につけ、表情の見えない、「知らない誰か」と肩を並べ、この場所にいたことを今でも鮮明に思い出します。

この日を境に、新たに始まった大学生活は、想像していたものとは大きく異なっていました。小さな部屋で、パソコンの画面と対峙する日々。相談相手もなく、孤独を感じることもありました。そんな中、初めて触れる社会学の世界に、答えのない問題に向き合うことの面白さを少しずつ見いだしていきました。

収束しかけては、また新たな変異株の脅威にさらされる。そんな繰り返しを経て、一年次の秋学期頃から徐々に、キャンパスでの大学生活が始まっていきました。そこでは、顔も名前もすでに知っている人間と、リアルで初めて出会うという不思議な体験がありました。

自然豊かなキャンパスでの大学生活は、私たちに新たな気づきをもたらしました。それは人の温かさや、コミュニケーションの大切さです。孤独な期間を経た私たちは、誰かといること、誰かと話すことが、どれほどまでに心を豊かにするのかを、身に染みて理解することができました。

この四年間で、多くの知識を手に入れ、多くの経験を積み、多くの思い出ができました。これは多くの出会いによって築かれたものです。この四年間は、小・中・高校時代と異なり、朝から夕方まで同じクラスで授業を受けるわけでもなく、部活に所属することを強制されるわけでもありません。そのような環境の下で、時間を共に過ごした友人や先輩後輩、教職員の方々は、紛れもなく、お互いが必要としたからこそ生まれた「縁」だと思います。生まれてからここまで育ててくれた家族を含め、これまでの出会いが、一つでも欠けていたのなら、今日という日を迎えることはできなかったと感じています。改めて感謝を伝えさせてください。ありがとうございます。

これから、私たち卒業生は、小さな部屋を飛び出し、社会という名の大空へと羽ばたきます。その空は、希望に満ちた青空であると同時に、あらゆる困難が降りかかる嵐の空でもあります。私たちはそこで幾度となく、様々な問題に直面するでしょう。しかし、私たちは学びました。あらゆる事象を複眼的に分析することの大切さを。時には緻密な「虫の目」で、時には雄大な「鳥の目」で。社会学との出会い、「大切な誰か」との四年間の記憶を胸に、気まぐれな大空を、シラキジのごとく、不器用にも力強く、そして懸命に、前へ進んでいきます。

最後になりましたが、これまで支えてくださった諸先生方、職員の皆様、共に学んだ友人たち、そして温かく見守ってくれた家族へ、卒業生を代表し、心からの感謝を申し上げます。以上、武蔵大学の一層の発展を願うとともに、皆様の健康、ご多幸を祈念し、答辞と致します。

二〇二五年三月二十二日